

良経の歌風

— 初学期をめぐる (一) —

片 山 享

藤原良経の歌風の展開を第一期初学期(養和元年—文治五年)第二期新風期(建久元年—正治元年前半)第三期(正治元年後半—建永元年)の三期に分けて考察したい。良経の詠歌年次については前稿⁽¹⁾に考察を加えたが、不備もあり、また述べ足りない点もあって、歌風の検討に入る前に初学期良経の詠歌環境の二・三の問題点を述べることから始めたい。

一、良経をめぐる文人

良経の初学期(二三才—二才)は、養和元年より、文治四年二月二十日急逝した兄良通と共に連句・時の習作にいそしんだ時期と、良通亡き後、良通の影響を離れ独自の道を歩き始める文治五年までの時期である。すなわち「玉葉」の記事によると、養和元年九月七

日「大将・侍従密々有連句七十冊」を初出として文治三年二月九日良通初度作文会に至る連句漢詩会の記事は連句・詩会四一回、詩歌会四回、和歌会一回の四六回をかぞえる。良通の催しがこれにとどまらなかったことは、玉葉・元暦元年九月一日の条、

大将方密々有作文、毎月三ヶ度例事也。木六ヶ度也。此両三月減三ヶ度。

とあるのによって何うことができる。玉葉の記事はこの催しについて「大将(良通)・侍従(良経)」または「両息」のように兩名を併記しているが、文治元年ごろから「大将密々有作文事」のように良通主催の記事が増えてくる。おそらくこの年あたりから成人してきた良通(一九才)の主體的な詩活動が行われるようになった事実の反映とみられるが、「大将方密々有詩、又有当座三云々。中将有言句。」などとあるように良通詩会には良経が同席するのが常

であったようで、良経は初学期の大半を良通に従って連句・詩作にいそしんだと思われる。

ところでこうして頻繁に催された良通・良経の連句・詩会の会衆は「文士二両合会」「長光入道・光盛巳下」「文士七八許輩」「光盛・光長以下文士十余輩」のごとく二・三名から十名内外の比較的小規模な密々の会であり、かつ玉葉記事は代表的人名を挙げるのみで会衆の全てを明らかにし得ない。玉葉にみえる文士名を挙げると、

長光・資隆・範季・資実・光長・光盛・業実・長守・定長・親経
・敦綱・尹明・兼忠・有家・宗頼・基親

である。このうち、長光・資隆・範季は他の会衆とはやや異なるようである。

範季が顔を出すのは養和元年十月一日の、

大将・侍従有三連句興、範季候レ座。

のみである。範季は文章博士範兼男で後鳥羽幼帝を養育し、尊卑分脈によると「文治・侍従・元久二卒、贈左大臣従一位、依願徳院外祖」とある人で兼実家家司治承二・一〇・二五であった。右の記事によると「範季候レ座」とあって会衆としてではなく、おそらく初学の良通・良経の連句の指導・後見のために一座していたのではなかったかと思われる。

長光は文章博士で尊卑分脈に「安元元年十月三日出家阿念七十三

とあり、玉葉同十日の条に

今月三日於高野二忽出家入道、今日示送此由、誠哀事也。長光為三当今湯殿橘、而不レ浴二一恩、空以遁世、為レ君為レ世、第一之遺恨也。余聞三此事、悲哀無レ極。

とある。弟成光は兼実家家司で長光自身も兼実と親しく「長光入道米、語和漢事等。」（安元三・三・六）などのごとく際々兼実を訪れている。養和元年といえれば既に七十八才の高令である。その記事は、

(1) 養和元年十月十五日

兩息有三連句会、甘願、長光入道、光盛巳下、文士七八許輩、

密々事也。大将・侍従同敷也。共十。四願。

(2) 同年十一月二十二日

大将・侍従有三連句会、甘願、長光入道在座、光盛・光長以下文

士十余輩。頗有三其興、又有レ詩、中不備レ

(3) 寿永元年四月二十八日

大将米。此夜密々有詩連句等、長光入道候レ其座。

(4) 同二年三月十八日

大将米此第一、中将相共密々有詩、文士七八許輩、不レ期而

会、光長、定長共在三此座、題云、春深貴踐家中、長光入道レ

之、即候レ座也。

とある。(1)は連句会に加わっているらしいが、(2)以下は「候レ座」

とあつて長光の高令からみても単なる公衆ではなく、おそらく兼実
に依頼されてその指導に当たっていたものと思われる。

次に資隆入道は、從四下少納言で本名季隆、治承三年以降寿永二
年以前に出家入道した。和漢兼作の人で玉葉仁安元年正月二十八日
条に撰政家詩歌糸竹会で「詩資隆少納言、哥重家朝臣等宜云々」など
とあり、また兼実家治承百首や治承三年十月十八日歌会に出詠して
いる兼実歌壇常連の歌人であった。寿永二年閏十月十三日の条に

入レ夜資隆入道來。令レ見二大将所レ作一之詩等一、加三褒一答二、及三深
更一退出了。

とあり、兼実が良通の詩を見せたことが良通詩会に近づけた契機と
なつたと思われ、三日後の良通詩会から顔を出している。

(1) 寿永二年閏十月十六日

入レ夜、大将・中将密々有レ詩。資隆入道在二其座一。

(2) 元暦元年三月二日

(兼実、良経を伴い良通方を訪ねる。)及レ晚資隆入道來。有レ詩
哥之興一、及三深更一帰來。

(3) 同年五月二十二日

此日大将講二無題詩五首一。資隆入道并親経等在二此座一、中将同
之。

(4) 文治元年五月七日

入レ夜、大将有二小文公一。資隆入道來。

(5) 同年八月二十日

(公継米り、琵琶を弾き、良通・良経、催馬楽を備す。)先是、
有二連句事一、資隆入道在二座一。

(6) 同年九月六日

今日大将方又有二密々詩一、其後又有二当座和歌一、各序、題云、
月照菊花云々。資隆入道在二座一。

(4)に資隆が出詠したか否かは不明であるが、やはり公衆としてと
いうよりも一座していた語気が強い。時期的に見ても範季は養和元
年一度のみであるが、長光の養和元年・寿永元年・同二年、次いで
資隆の寿永二年・文治元年と重なることなく、これら三名は共に公
衆というよりは指導・後見的な立場にいたたのではないかと思われ
る。

さて、次に公衆であるが、光長は光房男で嘉應二・四・二三に兼
実家司とみえている。光盛は文章博士・光光男で治承二・一〇・九に
兼実家司補任。宗頼は光頼男で治承二・一〇・一五に家司とみえ
る。業実は後の文章博士、文治一・六・二〇家司とみえ、資隆は文
章博士兼光男で本名家実、文治二・一〇・二〇家司とある。親経は
後の文章博士・後鳥羽・土御門二代侍読、大外記として兼実邸によ
く訪ねたが、寿永二・三・二九条に「侍臣」とあり、兼実家近臣で

あつたらしい。文治五・一・九家司を兼ねている。以上は兼実家司を兼ねた者たちであり、他に有家は六条藤原重家男、和漢兼作の人で和漢兼作集作者で漢詩三首が収められている。正治・建仁期良経詩壇の常連でもある。ただし元久詩歌合では歌人として出詠しており、本領は和歌にあつたと思われ、兼実歌壇出詠の歌人であつた。尹明は知通男、兼実歌壇歌人でもあり、弟伊藤・男知範は共に後の良経詩壇に連なっている。定長は光房男で光長の兄に当たり、寿永二・三・二九の条に親経と共に「侍臣」と記されており、兼実近臣であつた。兼忠は兼実家出入りの雅頼の男、基親(平)は兼実家出入りの近臣。敦綱は文章博士合明男。長守は菅原在長の男。玉葉元暦元年六月十日の条に

今日菅原儒士長守初参又敦綱来。大将・中将賦当座時。

とあり、この時以後、良通詩会に加わっているようである。兄の在茂また男為長も後の良経詩壇に連なっている。かくて良通・良経連句詩会会衆は兼実家司および近臣、兼実家出入りの文人、これらに菅家儒士長守および藤原敦綱を加えた範圍のものであつた。

玉葉に記されなかつた巴下の儒士会衆の範圍はどうかというに、参考とすべきものに文治三年二月九日に催された良通初度作文会がある。玉葉によると同六日の条に

此日内府欲展詩筵而人々多依不来延引来九日了。

よつて延引し、家司行頼が兼日文人に催しを知らせ、忠通の永久初度作文会に倣つて催したもので参会者四十三人の大規模なものであつた。参会者を掲げると、

亭主 ○内大臣(良通)

上達部 通親・経房・兼光・○良経・雅長・隆房

殿上人 光範・公時・顕家・宗頼(家司)・公衡・○兼忠・忠季

・光輔・○定長・親雅(家司)・光綱(家司)・定経・○親経

(家司)・宗隆・頼房・○家実(家司)・頼定

儒者 敦経・在茂・○業実(家司)・維房・能成・○長守・光章

・季光・通業・盛経・宗業・為長

文章生 孝範

学生 安成・敦倫

非成業 ○有家・有経・為季・長房(家司)

(○印は初学期良通詩会文人。}は建久・正治・建仁期良経詩壇会衆)であつて、上達部・殿上人はともかく儒士会衆の範圍を推察することが出来る。そしてこの良通初度作文会の参会者は後の良経詩壇に名前のみえる兼光・光範・定長・親経・在茂・宗業・為長・孝範・敦倫・有家・長房などが重なり合つたのであつて、世代交替による増減はあつても、良経詩会々衆は良通詩会々衆をそのまま引き継いだものであつたことがわかる。これについては改めて後述す

る。ともあれ良通・良経連句詩会々衆は兼実家司・兼実家出入りの文人・若手儒士を加えたもので比較的気軽な密々の催しであったことが知られるが、だからといって当時詩作者の水準からみて必ずしも低いものであったとは云えない。例えば文治三年二月二十七日に御書所作文があり、兼実・良通は堅固物忌で行かなかつたが良経はひそかにその詩席を伺っている。その規模は殿上人十三人・儒士七人・文章生一人・衆三人で、殿上人は光範・公時（不参）・宗頼・公衡・兼忠・光輔・定長・定経・親経・宗隆・公藤・家実・基定（秀才）、儒者敦経・在茂・兼実・維房・長守・通業・宗業・為長、文章生孝範であつて、良通詩会常連者も多く、良通初度作文会参会者と殆どが重なり合うのによつても伺うことができる。

ところで、良通・良経はこの期、これら会衆に囲まれて連句・詩作に興じていたのであるが、この期の和歌行事は玉葉記事を検するかぎり極めて渺い。良経にはもともと和歌への志向が顕著であつたことは、良通連句会の始まる養和元年に、

今夜侍従方庚申之次、有連句和歌等事（十月十七日の条）
とあるのによつて明らかであるが、この期の良通・良経の詠歌に關しては、

(1)元暦元年二月二十二日

（親性勸進により慈円法恩講を催す）此行之本意、以雜芸（習藝、詩歌等）

奉供養於仏云々。

仍会合之道俗、密々詠詩歌。事不及及、大将・中将同詠之、為三結縁一也。

(2)同年三月二日

（兼実、良経を伴い良通方を訪ねる）及、晚、資隆入道来、有詩歌之興。

(3)文治元年九月六日

今日大将方又有密々詩、其後又有当座和歌各序、題云、月照菊花云々。資隆入道在座。

(4)同年十一月六日

大将・中将密々有和歌、中将書序。

(5)同年十一月二十七日

今大将方密々有詩歌。

(6)同二年三月五日

（慈円、法恩講を催す）此次密々被講詠歌。大将・中将同詠之。

(7)同三年二月九日

良通初度作文会（和歌）

が記されているのみである。これらの記事から既に指摘されているごとく、①良通・良経（ことに良経）に詠歌を誘ひ勧めたのは叔父

慈円であろう。②文治元年九月六日の記事が良通和歌の初見であり、玉葉の「近日又学_レ和韻_二」の記事と関連して良通の詠歌はほほこのころからみられるわけであるが、慈円の法恩講を通じての影評は暫く措くとして、良通・良経をとりまく詠歌会衆は連句・詩会々衆と同一であったと思われ、前述の連句・詩歌会に名のみえる歌人は資隆・有家・尹明のみであつて良通・良経をとりまく詠歌環境は必ずしも詠歌に因しては恵まれたものではなかつたらうと思われる。仮に拡げても兼実家に出入りしていた頼輔（女が兼実愛妾で良通・良経も頼輔邸に一時滞在している。）や六条藤家歌人および兼実常祇候男女（青木賢家氏は良清・盛方・尹明・資忠・隆信・行頼・季広および丹後・皇嘉門院別当を常祇候男女の範圍とされたのは違見である。ただし、隆信・盛方は玉葉承安二・四・十四および治承二・三・廿の記事により除外すべきであろう。）の範圍を出ないものであつたらうと思われる。

二 良経と定家

九条家と御子左家との関わりは、兼実家歌会の指導者であつた清輔の死（安元三・六・廿）以後、以前から兼実家会の常連であつた隆信の推挽もあつたらしく、兼実は治承二年二月ごろから隆信を通

じて俊成を懇懇し、同六月廿三日、俊成が兼実邸に伺候し、翌日首和歌の合点を依頼された時からである。寂蓮も隆信を通じてか、治承百首を詠んでいる。

この期の定家については、定家が寿永元年俊成の致命によつて堀河院題百首を詠んだ際、

詠_ニ於此哥_一時、父母忽落涙、將來可_レ長_ニ此道_一之由被_レ放_ニ返抄_一、
隆信朝臣・寂蓮等而々、吐_ニ賞歌之詞_一、右大臣殿故有_ニ称美御消_一
息_一、俊恵米扶_ニ養心之涙_一。（拾遺愚草貞外注）

とあり、おそらく兼実は隆信辺りから話を聞いて俊成からその詠草をみせられて披見し称美の消息を与えたものであろうか。もっとも玉葉記事では兼実が定家を歌人として認めた記事は殆どなく、僅かに文治二・七・九、兼実内裏直廬で報贖之間、季経・経家・定家を召して連歌に興じた記事の外には、建久五年八月十一日中宮初度管弦和歌会に出詠歌人としての名を留めるにすぎない。

ところで定家は文治二年ごろから九条家に近臣として出入りを始めている。その初見は文治二・三・十六、兼実拜賀の前馳殿上人奉仕である。文治二年から文治五年までの兼実家奉仕の記事を玉葉から煩をいとわず掲げると、

文治二年

三・十六 兼実拜賀に前馳殿上人を勤む。

七・九 兼実内裏直廬で季経・経家と共に召されて連歌を詠む。

八・九 勅使九条家に来りし時、良通に杏を献す。

十・七 兼実拱政詔の後、着陣儀に良通に杏を献す。

十・廿 良通大臣宣旨、参内に扈從、良通に杏を献す。

十・廿九 良通任大臣、兼実参内に扈從す。(殿上人親能・定家

等) 良通参内に扈從す。(殿上人親経・宗因・定家・高通等)

十一・二 良通内大臣拜賀に前馳扈從す。

(^{殿上人}季経・経家・伊輔・親雅・定経・親経・定家・高通・宗

因・頼房・行経) 中符(良経) 前馳(宗成・惟頼・惠実・邦

兼) 十一・七 良経着陣参内に扈從す。(殿上人定家・高通・頼房)

文治三年

一・三 兼実家臨時客儀に瓶子役を勤む。

一・十三 兼実妻・任子・良通妻の法成寺初参(良通・良経相具

す)に扈從す。(兼宗・親能・定家・高通・忠行)

一・廿九 良経拜賀に扈從す。(殿上人定家・頼房・忠行)

二・十一 春日神馬使儀に兼実扈從、杏を献す。

四・三 兼実の使として鳥羽殿に赴く。

八・廿一 兼実扈從して平等院に赴く。(殿上人・季経・宗頼

・宗雅・定家・能季・忠行・光綱) 良通扈從(仲盛・清忠・経泰・康宗・光茂・国基・忠光・忠頼)

十・廿三 兼実、八条院に赴き、定家扈從す。(伊輔・定家等)

十一・廿七 兼実、高倉院第二皇子御着陣儀に参上、定家扈從

す。(伊輔・定家等)

文治五年

十一・廿三 兼実参内に定家扈從す。(忠季・能季・定家等)

十二・一 良経着陣儀に定家扈從す。(殿上人忠季・定家等)

十二・六 良経参院に定家扈從す(殿上人定家・高通・頼房等

也)

十二・十一 任子、日吉社参詣に扈從す。(定家)

十二・十四 兼実任太政大臣、参内に定家扈從す。(殿上人親能・

忠季・定家・高通等)

以上の記事によってみると、文治年間、定家は兼実(11回)を中心に良通(5回) 良経(4回) 任子ら(2回)に仕えており、云わば兼実家近臣としてよく勤め、石田吉貞氏の指摘されたごとくそれは定家が後に「雑役如匹夫」(明月記・寛喜二・七・十六)と回想したとき勤めぶりなのである。明月記は文治―建久二年までを殆ど欠いているので不明であるが、建久三年以降、建久年間をみると、定家は兼実・良経(後に良輔にも)に仕えているが、最も多い

のは良経であった。これについて石田氏は「定家が直接に仕へたのは家主兼実の外は良通・良経の二人だけであり、而もそのうち良通は二年後の文治四年に夭逝してゐるから、常に近侍したのは兼実・良経であり、更にそのうち定家が主として仕へたのは、初から良経ではなかったかと思はれる」とされ、その証として文治三・一・廿九の良経拜賀供奉殿上人「侍従定家・少納高頼房・散位忠行」とあるのに、建久二・十一・二十二童女御覽参内に「予（兼実）共忠季朝臣・高通朝臣、大将（良経）共定家朝臣・頼房」とあって良経の扈從者はいつても定家・頼房等であることを挙げていられる。確かに文治年間新参の近臣定家は良通・良経に扈從することが多かったが、（高通・頼房・忠行についても同様である）前掲の殿上人供奉者を詳細にみるならば、この指摘は必ずしも妥当とは考えられないのである。

定家が九条家家司になった時期について文治元年とする風説は石田氏によって文治二年とされ、藤平氏は石田説を検討して文治二年説を否定し、その時期を兼実が退隠し、良経が九条家の中心となつた時期ではないかとされている。⁽⁵⁾

ここで注目しておきたいのは、明月記建久七年六月六日の条である。

午時許着^三東帯^一参^三大炊殿^{今、日知}。依^レ召^三参^二御前^一之間、内大臣殿

御参、仍退出。相次参内。参^三御御方^二、謁^三女房^一、婦路参^三向^二三条^一、夕婦座（統群書類從刊行会本）

因書刊行会本は「六日」がなくて「五日」の日付になっており、かつ「今日出仕」と割注にあり「初」を欠いている。右の「今日初出仕」は家司として初めて兼実大炊御門邸に出仕したことを云っているのではないか。家司補任の記事がないので明証を欠くが、明月記同六月十六日の条に、

入^レ夜参^レ殿。今夜御参内。置^三電装束之間、無^三衣裳^二不^レ参^三御共^一由内々申了。今夜布衣猶借物之由申了。以^三右馬櫛頭^二安細有^レ被^レ仰旨^一、年来本意已以是足^三面目^一。恐悦。更不^三申披^一、于州小所一所給ら之。但有^三其関^一者、可^レ替^三尋常所^一由被^レ仰、畏悦退出。

とあるのはその十日後である。兼実は定家の窮状を憐んで伊予小所一所の得分を与えたのであろう。「年来本意已以足^三面目^一、恐悦」と定家が悦んでいるのは文治二年以後の雑役匹夫のごとき近臣時代を経て家司に補され、初めて兼実から小所ながら一所を与えられた悦びであつたと思われる。以後兼実から正治元年七月三箇荘を得、同年八月九条家の内意により親雅から一所を得、建仁二年二月兼実から大内荘を得ている。そして良経からは建仁以後所領を与えられることとなる。⁽⁶⁾ともあれ、定家は近臣以後、直ちに良経家司となつたのではなく兼実家司となつたのであり、それは建久七年六月のこ

とであったと考えられる。良経家司となつたのは藤平氏の推定のごとくおそろく兼実隠退後、良経が九条家の家長となつた任左大臣以後のことと思われる。

かくてこの期の良経と定家の関わりは、文治二年以後定家が九条家近臣として仕えるようになり、良通・良経に屢々感従しているものの、少くも文治四年二月の良通没までは和歌に関しては建久期以後の良経と定家に見られるような密接なつながりはなかつたと思われる。長秋詠藻（為秀本）によると、良通急逝後、慈円が寂蓮を通して俊成に良通・良経の歌どもを遺っている。良通・良経の歌は慈円がとりまとめているわけで、この時期まで良経は和歌に関して叔父慈円の傘下にいるわけで、良経と御子左家、なかんづく良経と定家は近臣主従関係にありながらも歌人のつながりは稀薄であつたとを推測させるのである。

三 千載集所収の歌

文治四年撰進された千載集に良通四首・良経七首が入集した。この年二月二十二日良通は急逝し、千載集入集歌は良経が兄良通の影響の下に養和元年より文治四年二月に至る連句・詩歌の習作にいそしんできた時期の詠を収めたことになる。

千載集に入集した良通・良経の歌を次に掲げる。

良通（内大臣）

（昌蒲のうたをよみ侍りける）

(1)のきちかくけふしもきなく郭公ねをやあやめにそへてふくらん

月照草花といへるころをよみ侍りける

(2)しらぎくのはにおくつゆにやどらずは花とぞみましてらす月かけ

閑路雪濁といへるころをよみはべりける

(3)ふるままにあとたえぬればすすかやまゆきこそせきのとさしなり

けれ

称他人恋といへるころを説侍りける

(4)しのびかねいまはわれとやなのらましおもひすつべきけしきなら

ねは

良経（左近中将）

かへるかりのころをよみ侍りける

(1)ながむればかすめるそらの浮雲とひとつになりぬかへるかりがね

花のうたとてよみ侍りける

(2)さくらさくひらのやま風ふくまみに花になりゆくしがのうらなみ

虫声非一といへるころをよみ侍りける

(3)さまままのあまぢがはらのむしのねをあはれひとつにききこなし

つる

閑居聞歌といへるころをよみはべりける

(4) さゆるよのまきのいたやのひとりねにころくたくるあられふる

なり

契袂秋恋といへるころをよみ侍りける

(5) あきはをしちぎりはまたるとにかかくころにかかるくれのそら

かな

(称他人恋といへるころを統侍ける)

(6) しられてもいとはれぬべき身ならずはなをさへ人につつむべしや

は

法華経弟子品内秘菩薩行の心をよみ侍ける

(7) ひとりのみくるしきうみをわたるとやそこをさとらぬ人はみるら

ん

両者の歌を比較すると、ともに四字結題が多く、良通・良経連句

・詩歌会との関連が強く感じられる。例えば良通(2)の歌題は浄嘉堂

文庫本千載集には「月照草花」とあるが、他本は「月照菊花」であ

り、青木氏が指摘されたように文治元年九月六日の良通家詩会後の

当座和歌「月照菊花」と歌題が同一でこの時の歌であったと思わ

れ、また良通(4)は良経(6)の歌と共に「称他人恋」で千載集には並べ

て排列され、良通・良経歌会で同時に詠まれたと考えられる。こう

して良経七首の入集歌の多くは良通・良経歌会の歌が含まれている

と思われる。

しかし両者の詠風の相違はまぎれもなく明らかである。良通の歌

は(1)の下旬「ねをやあやめにそへてふくらん」の下旬に一首の趣向

の中心があり、音・根の掛詞によって知的なおもしろさをわらった

ものであり、(2)は「はにおくつゆにやどらずは花とぞみまし」に、

(3)は「ゆきこそせきのとさし」に趣向の中心である。つまり良通の

歌は中古風(六条藤家風といってもよい)の趣向を中心とした詠風

であるのに対し、良経の歌はすなおであるが純感覚にもとづく、律

調に破綻のない、清新な歌となっており、中古風の傾向の強かった

と考えられる良通詩歌会の中にありながら、それに同調することな

く、良経独自の詠風をもち、それが後年新風和歌として開花してゆ

く基盤となっているのである。

この期の良経の歌の特色は作者の視点の明確なすなおさである。

例えば(1)の歌は視覚的印象の鮮明な歌である。「ながむれば」と視

点を設定し、一面に霞む大空、その中に浮ぶ遠い浮雲——とびゆく雁

の影が次第に小さくなってついにその浮雲と一つになる。雁は浮雲

の中に消えてゆくのであるが、「一つになりぬ」に空間的把握の確

かさがあり、作者はその過程をじっと見つめているのである。この

期の同じ素材を歌った、定家の

はるさめのはれゆくさらに風ふけばくもともにもかへるかりが

ね（養和元年初学百首）

行雁の霞のころもたちかきわかへるもきたるここちこそすれ（寿永元年堀河院題百首）

まだきより花をみすててゆくかりやかへりてはるのとまりをばしる（文治二年二見浦百首）

秋ぎりをわけしかりがねたちかへりかすみにきゆるあけぼののそら（文治三年皇后宮大輔百首）

と比べてみると、定家の初学の歌には「霞のころもたちかきわね」「はるのとまり」など古歌のことはになつた表現が目立ち、「かすみにきゆるあけぼのの空」はさすがにすぐれているが、米雁と短雁の対象に発想の中心があり、良経の視覚的印象鮮明な歌とは異質である。(3)の歌は句題百首の歌題と一致し、経家卿集に

むしのねも千くさのはなにうつろひていろいろにこそこゑはきこゆれ

の歌がある。この歌は虫の音が「千くさのはなにうつろひて」いろいろにきこえるというのであって、そこに趣向の中心がおかれ、知的趣向の歌にすぎない。良経の歌はさまざまの虫の音を「あはれ一つ」にきくところに中心がおかれ、虫の音の多様性に焦点を当てるのではなく、むしろそれを聞く主体に焦点を当てて聴覚に把握した実感として「あはれ一つ」に聞くのであって、この点では(1)の歌と

対象把握の方向は同じであるが、(1)の歌の客観的把握に対して「ききぞなしつる」という強調表現は雅なさを露呈しているというべきであろう。

(2)(4)の歌は千載集入集歌中の佳吟であるが、いずれも先蹤の類歌がある。(2)の歌については

さくらさくひらの山風うみふけばはなもてよするまののうらなみ（有房集）

さくらさくひらの山風ふくなへは花のささなみよするみつらみ（重家集）

おそらく良経はこれらの歌に影響されて詠んだと思われる華麗な歌である。この歌について奥村晃作氏が重家の歌をあげ、良経の「花になりゆく」が波が花のように見えるという見立て（直喩）を超えて暗喩の表現にゆきついていると指摘されたのは正しく、先蹤作品の「はなもてよする」「花のささなみよする」という趣向を超り越えて新たな表象世界を現出しているのである。こうした対象把握の方法はあるいは漢詩に親んだことの結果であつたかもしれぬ。ともあれ、ここでも

雪とちるひらのたかねの桜花猶ふきかへせしがのうらかせ（定家・文治三年大輔百首）

と比較するならば、道具立ての多い定家の詠に比して良経の歌は華

題とはいえ単一的な視覚的イメージの歌であって、そこに良経詠風
の特色がみられる。

(4)の歌は、千載集では俊成の

月さゆるこほりのうへにあられふりこころくだくるたまがはのさ
と

の次に排列されているが、良経の歌には明らかに俊成の歌の影響が
みられる。俊成の歌は久安百首の歌で、久保田氏が指摘されたこと
く、俊成のこの歌は良経以外にも、兼実の

ゆふさればそのあさぢふたまちりてこころくだくる風のおと
な

にも影響を与えており、良経は兼実を通じて俊成の久安百首などに
も親しんでいたと思われる。しかし、この歌は素材を俊成の歌に仰
ぎつつも自己の主體的な詠法に消化し、俊成の道具立ての多い説明
的な詠をつきぬけて、一直線にきびしく冴えた荒涼たる自己の心象
風景として詠じてるのであって、後年の冴えた寂寥たる詠風の原型を
なすような歌である。

(5)(6)は四字結題を一応よみこなした習作というべく、(5)は「とに
かくに」などに習作的ななごりをとどめているが、初句・二句切れ
になっており、この期にさまざまな句法を試みたことを思わせるも
のがある。(6)は前述のごとく良通と同時詠の歌であるが、良通の歌

に比べると詠み口ははるかに洗練されており、良経が良通に比して
既にかんりの歌歴を有することを思わせる。(7)の歌は玉葉元暦元年
二月二十二日初見以後しばしば催されたと思われる慈円法恩譚の詠
と考えられる。法華経・五百弟子受記品第八の「内秘菩薩行 外現
是声聞」の偈によって詠まれたものであるが題のごとく「内秘菩薩
行」に焦点を当て「ひとりのみくるしき海をわたる」と一苦行僧の
姿を描き、下句で実はそれは菩薩行を秘めた姿であることを示して
いるのであって、後の良経の釈教歌にみられることき主体とのかか
わりにおいて詠嘆する傾向はまだみえず、想像をすなおにはたらか
せて詠んだ初期の釈教の歌である。

千載集所収の良経歌七首は、もとより俊成の撰歌眼を通した良経
初学期の歌であるが、良通歌四首からみても良経初学期の佳作を撰
んだものと見てよいであろう。そして初学期の歌風は、その歌の多
くが兄良通詩歌会で詠まれたと思われるにもかかわらず、良通詩歌
会がもっていたと思われる中古風の趣向の歌の影響を受けることな
く、すなおではあるが、主體的視点の明確な印象鮮明な歌である
ころにその特色がある。そしてそれはより多く良経の資質に依る
ころが多かったと考えられるが、(2)(4)にみられるよう既にこの期、
先蹤作品によりつつも良経独自の世界を志向しており、建久期、慈
円・定家・寂蓮の相互影響の下に新風を形成してゆくことを予見さ

せるものがある。

以上、千載集良経入集歌を検討してきたが、ここで前稿の補訂をしておきたい。前稿で千載集入集歌題「虫声非一」が句題百首中の題と一致することから良経は或いはこの結題百首を試みた可能性を述べた。その後青木氏によって摘題和歌集に同句題「古渡千鳥」二首があることが指摘され、その可能性はますます強まったわけであるが、詠歌年次について経家卿集・隆信集に若干の同句題が見え、文治三年十一月慈円・寂蓮が同句題百首を詠んでいることから良経詠を元暦元年—文治三年九月以前と考えた。その際に経家卿集の「百首中に」の歌を隆信集の「右大臣家後百首」と同様に右大臣家後百首とみたのは失考である。結局治承四年十二月重家没以前に重家によって句題が出題され、重家・経家・有家が詠んだ可能性があり、寿永元年一月以降文治二年三月以前に右大臣家後百首として隆信が詠み、文治三年十一月兼実給題によって慈円・寂蓮が詠んだということになるか。隆信・慈円・寂蓮には共に兼実との関わりから相互の関連性が考えられるが、隆信集にみえる「後法性寺殿右大臣ときこえたまひしとき後の百首に」の詞書にあやまりがなく、(兼実が右大臣から摂政になったのは文治二年三月十二日である。)広本拾玉葉の句題百首端書に見える「文治三年十一月廿一日詠之。自三九条殿一給題、与寂蓮禅門相共風吟畢。」の記載に誤りがない

とするならば、兼実給題による慈円・寂蓮句題百首詠以前に同題の「右大臣家後百首」が詠まれていることになる。実は前稿は良経詠に関して慈円・寂蓮句題百首以前の詠ではなかったかというところに中心があったのである。千載集の撰進過程は不明な点が多く、序文の文治三年九月二十二日と明月記にみる文治四年四月二十二日のいずれが実際の奏覧日であったか、今日なお決定的な結論は出ていないようである。⁽¹²⁾久保田氏によって文治三年十一月詠の家隆の百首中の一首が千載集に入集していることが指摘され、これが今日判明している千載集詠歌年次の判明している下限と考えられているが、もし良経の「虫声非一」が慈円・寂蓮句題百首に触発されて詠まれたとすれば、ほぼ同じ頃と考えられ、その可能性は充分にあるが、この時期前述のごとく俊成と良経との関わりはそれほど密接でなかった(青木氏は文治四年四月五日、慈円が俊成に亡き良通と良経の「歌ども」を選った中に含まれていたかもしれないとされている。)⁽¹⁴⁾点を考慮に入れ、さらに良経の「虫声非一」の稚なさを考えれば、撰集の最終段階で俊成が果して入集せしめたかどうか疑問が残るのである。

(1) 拙著「校本秋篠月清集とその研究」研究篇、藤原良経詠歌年次考。(昭51・空閒書院刊)

(2) 藤平春男氏「新古今歌風の形成」第一章「建久期歌壇と新古今への

- 道。(昭44・明治書院刊)
- (3) 「藤原良経全歌集とその研究」研究輯一、嘉応〜文治期(昭51・笠間書院刊)
- (4) 「藤原定家の研究」第二輯・第二章 青壮年期の歌。(昭32・文雅堂書店刊)
- (5) 藤平氏、前掲書。第一章・I
- (6) 石田氏、前掲書。第一輯・第二章 經濟生活
- (7) 久保田氏校注「千載和歌集」(昭44・笠間書院刊)による。
- (8) 青木氏、前掲書。研究輯一
- (9) 「良経と新古今世界」(群青・No.6・昭50・5)
- (10) 前掲「千載和歌集」解題。
- (11) 重家集に同題「古遊千鳥」「別不念恋」二題があることは久保田・松野両氏の指摘があり、また月詠集に有家「山家送年」一首があることが青木氏によって指摘されている。
- (12) 前掲「千載和歌集」解題。
- (13) 同書。なお、谷山茂氏は文治三年九月奏覧についての御論で、この家隆文治三年十一月作の歌も「九月以降の単純な切継歌とすれば、文治三年九月奏覧を否定し切ることにはなるまい。」とされ、切継の可能姓もあるという立場をとっていられる。(陽明選輯3「千載和歌集・長秋詠藻・熊野懐紙」解題・昭51・思文閣刊)
- (14) 前掲書・研究輯三、正治ノ元久期。